菊乃一露 自画 六

12
881
60

清心さしつほとも哀まさ紅おもひこそ待ゆめまし

中将の心さしれるなや林の夕といふ月の面白しといひ

又尼公も無常にくく人をくあはみて悲しくあるやと

甲にてよせておおね尼あと云るや　細　川常の盛とおね

し給ふとや

限乃事もなきし路さんるなども世行人

中路乃んてよきも様りかの人に世の事を行へとおおね尼　中将乃

とひさむるや

去とはんあとのやうに物思ひしあるこそ尼といひたいと

うち詠めくれほ也　花　藤の葉りさく初花乃よき

思ひ立こははくともとりいでめや

花を見よしとひて月乃のほひ乃一雨あるとひ世した

無あるへしいとこしおほくうしろそ　おね尼ちも語

も物語のよしなとをいへるも畫え中将殿よりの文はかひ
の人にまつ一所を小野にとゝめをきよしなと申間なるを
や中将よく申てさらへからんもあるへし
御こゝろを申侍へし　中将ちかくにゝうてこゝろ詞也
なくなりくて申さんするは申すへしと申にもおほしこと
されとも給りつひにゑもいとゆかりをかすよ侍りてこ
そ物の哀をもまさしきあまりの給ふなと　中将の詞也
秋ちかくよりてやさんするをしはなれぬ物いひを申す
みくりんと思含て中の給へとの縁やありとされはか
なれ也や
あそめり　よかしぬといひてるやうの縁也
山里乃秋の夜なかの哀をなと物しらぬ人をわりひてこゝろ
中将殿　ま物語は物しらぬ人なれともやゝれ給ひきた

まひきる人さるのなる紙とみゆるや落葉は気給ふ哉や
弄 ま物語も見物しらぬ人なりし哀をもしらぬ事をよめるとも
とひこそ志をとゝめる詞面白き　細 ま物語も見物しらぬ人
人なりし哀なと志らぬ仰ある侍以て申也物しらぬ人
を思志る人さるゝなとも也落句面白き也
とのつゝは心をもかよひぬへきさまなとゝ侍る　中将
の文言也ま物語も物しらぬ人なりしも物をのこさん人とよく
物語也と云り　結 物思ひ給ふ人なりし気色なとも哀
のつゝ知給ひつきなとゝも
尼君物さゝせてまつさうしもとゆへきさん人も侍しもいと
よりぬやうなりんとせしも侍る　尼君も法師かなれ
たゝあるなると心をつけまうさゝりし事ともをよへなるかな
ま物語り也と奇し給へとかね尼あるとせむしろとや

うるさき物と思ひしてもこの君を物むつかしき人々にしらせたり
手習　我世の中にはひいりき物とも思ひしらは惘(バウ)
絶(ゼジ)としてたえたに人なき物むつかしき人とおもふはしらた
為ましとや　細　思ひはまとくまし何事とも卑下(ヒゲ)しける
わか身はさふの方なまし人にもあるへしとや　抄　手習者此
若為とも見えぬ身なる我物思ふ人と知るまし行
とかくしら給ふへしや
わさといふとも言ふたとえて浮人は申ゆまは　手習
は必定なりとも思ひてしめる我中納言尼にて中納言
侍るなる也
いと哀といひくあるを見てかくにて出給へと申しらるこう
せや　中納言のむ也申しらるとなり也
此人々にとまるよしなりて悩給　中納言のうちなる也

あやしきまてはしちかくそ見えて給ふやとて　少将尼
の詞也手習のなる也　抄　少将の事
ゆくみえて
まなかひをそ見めしたるしの我なつかしき人のいかに
いり給ふにけり見　大臣の君なる也尚は手習そなたに思
見むつかしき中納言をむつかしきわりなくそれ給如し
あさましう思ひてかくなみんと申ゆまは　抄　手習のこま
給中将が少将中将なりとや
うち我身はなやめ給へんものうち此哀ナ大臣の宿移る
ともも情なきなるましなる人乃　中納言の詞や手習はさのと
なをなさけなきる人こき人々かくはなれの情なれとれぬ也
いとおまきさ思ひしぬ人よりもをたにとてなし給めるこ
そ　哀をとも思ひしましたる人と見る人よりも手習は

まさつまでうひまゐらせぬ人そとの中納言殿や
そまでとおころもしらへるかなわいつれろさまに世をとう
らんでく　中納言の殿やより給ハかやうまん人のうひするにこ
つき給るることのあれらとや
いままでおうけつけぬ人をあをとありけさしとひく
中納言の殿やより給ハ世をとうしむといひまとりうささ
やうかくれつうけぬへききまそかや
いとゆかしきにのきおほいてれとこ南うあうるすハ心そてう
ハいひきうきん　かね殿の心やより給をとえ給ふとる
とはいまぬや
たまもり中納言の年はとうとくしきやう
にくもそうし給しとそうをはまらしておもひ行てさまつて
せする給へるやそいふ　お将殿やとの御給ふへき

親王殿の年月うとくしくりつる御物まよまいりて給
しみちしまで行わひく今こにまいりて給とゆるや
姫君そいともひつしやのさまくわいハ人のおもうまにいひふ
しているも行ましれ　大臣殿ハおもむつしむ人をと
より給め出来人中納言もつまいり給ふにつきておわ
しまはせや
よひまもひをえをいふはおもろくしきいひまゐらせて
大臣殿のゆきをより給のとろるや文まいらせハいつにふ
返いひきとおほろしくうき給や
おもふとうちもちひとうわきとも御まらせておほし
といひはかなをたりいとおもころしをうらひこの人く
あやくうまいらせんと思つもわしうるぬ男なれと
大臣殿お子もおほしぬおもれおひともかへ

してひさしくありうちもちひとは書にもいへる詞
なれハもちひあるやと云ふ人もおもひぬほと此年より此
縁あり
紛れなきなれハ此の橋なりやうありてうちよりまつきんと
地乃やうにまもしくおほゆ　此橋のわたりよりまつさきに鏡野
よ来勤と云り御流りいふは有人あらとなりんとし
兼て行よ一橋の名を有をと見てくおもちひわたりそまそて立
帰るやと云る縁わりよ語るもそのこときく一夜あかれなけ
たる人乃とそはりあらしく行てよそよのうたるよに思
ひくるにこれるやとねひ旅人のと於年おなさらぬ
くうまやせんとおもちいなを一橋より帰る人のかま
紛られハ子とと人のあひいるや此おかは猿にもあや弄同
河 狼梁（ヒトツハシ）此年来勤と　花咲る此周縁いまさき勤（カントク）仕せ

もて行する給ふと　細　む縁性あるしらをる在なれなりん
とせし人乃行を有一橋の花とてんとなる帰りたる
やと云る有人しましと
ゑまおとゝもにみてく行かしは造らる　大原云此なる人にても
きとよる者女と流まそておかし女かやもよしの名也
東路見のとうまふつきて大原見此る人行給うれと
此中将よめそて又中将のおもひを承下人ゆゑさる也
名めさそてこのめつくしおも男此見んたらあら給へるめんに
おもりいふけるいをやうる給くと待あ給へるまそて
中将の風流なるにもとよまそてよ語れさるを云出
云あるくにそてあねとも
わとまられおなあのましく人あらりや中将のひとつしひとくる人
つまぐれさ　云ありとたのりしさく人よまよ語れ渡まよ給

尼とそ見えさへこそになりけれはかくいふなるや
いと情なくもあはれなる心もたゝしまゝなられかゝるうち
とおもふてそへなく　少将尼なとれ手習にかゝる類也
皆一所に経の紙のうちとまやなりめりんと云事に経は
手習なとそへたらてか少将尼をとりいかにけれは一所に
経るなるや　細　少将尼にあまつ事とや
河　まし見えて尼君にお(は)しまして此かなをりたる　大尼
上の様とさりおかれてと心をみすさへまゝたる心なるや
ほりもにりしつまかはいてと見るさにく源氏物語とくつきて
此ところのうしろ経つるとおもやしうりてぞいふらうふたなる物
うれるわさをも経をさいりしもとにてくおやしもいはれ
そのまゝ経をなる色にゝく見んおもこを手のたくに見と
くひてんとも深と経ておほゆる　大尼君の鄙(ヒナイ)なると

おそくまうちゆかしてゝ手習をとかん経文の心をとそへ
心あり手習れ思ふかなんや　河　亀鼈のまうきをさへも云へるを見え
細　ましおもと成けく心なりや
罪のこゝろもまてさえん経文を物おほしゆかりれと申さく四や
もし　宇治中くの事とも手習のあへり事あそふんとし給
しは思ひたは大木の陰りゐ給しつるや
ゆうさ後まゝせんとおほゆる　手習れ出とかんや
むかしさらにいかんかま経よまていまかくりけりて又有
しいたくのうれいと成たこそれむかしも行そらしとも物
と思ひつゝ見るのましうれくまるをもおそろしきかなる物の心
たにそ見えあくまいりてとひやりぬ　手習れ見える給
ちく行もおそろしなくなちあらんと来世ろうを云へ
つま　花　冥途(メイト)に罪(ツミ)あそに逢(セメ)見んるなりや

昔よりのことゝもおもほしつゝけたまふにいとかう

心にくゝ人のゆるしきこえぬへき御ありさまを見なからはなれかたき御あり

さまとうたてあるくし月とゆるされぬ人さまにかたらひて

う詠し身のとし思ひのたし　細　是より八ハ君の一生

とまりハ京なとゝ見さる事也

もしかの浮舟の事を思ふとはなれぬ事なれ　中君

かたくなとも思ふすれハあるへし也

細
中君也

ある所にハひきこめ給へりしんゆつきて　是ハ薫

心ととめ給ひてつとめ給はは薫のゆるさるまし

ありさまをとはるん也　細　薫也

やうく我ハうきもたえさまにはしきこえめ給はすまし　宮を

さてそこなひたるあとを見るてゆかれとも君ともしく

をあかましと思ふもさこんなそいとくるしうなる　白宮を我

ほかなるやと思ふらむもしくぬまてものきみなれなや

細
白宮也

さてはゆるさにさはしく人のおもとと思へて　白宮ゆへ

うしろ君のさま人たつなや

小嶋のさかなはしに来給ふとあきてわかしとといひののし

そんとおもふれく　君の心の白宮は舟のさきみくあまた

て河のむかひへ君をとはせやさまし時年ワとそう

さしんなきの橘の小嶋のさきなよりちかきかたとよあるや

今とひ出給へや　まいとも君　橘の小嶋ハ名所也ハ

らしとところうきけ舟そゆく浮雲なしまぬ

わきのさる所にちかを　君のとひへを白宮なりけるなる

心やや

ちし給ふをさうもとめなくしものゝやうに扨さ給ふし今迄この
折々の折節とあひ出るまじきこれなりけり　是ハ蕉翁なり
とよ揚もうちすなるとハ笑ひけるなり

拾
細
夏衣うちかけたのまるゝひとへかたにかけ
蕉や折くに出るや芭蕉にさかりあめもこの葉
見るたりく人の心まちいとなし人多るなり
かくてこそ有りけれとせつなきしもなきんまつしきさいハ人よ
里さむさりぬへし　よ揚れ山やかやうにふかきよ有りと
さうまんよ白菊又消くとりも蕉の心さつしうるん
の縁や　弄　蕉の文るの白宮の好ゐとこてるにさま
さるんおり芭蕉ものこと云ひし雨めも見てしたりさ
さもろにも世ゆは有し治さ庵とよ我とかくたふりける
見んやもとこちるす　蕉とよ揚の見てたとれ

んや白菊とハおれ詞りとまれく何ともなくこうちのる
とかつる前あもお意すや
扨よ揚の山やうくうちに思ひしみと
もよろかなんそともやとえ女はゆきまりきとの鳥揚　蕉と見んとこふ
のんや
心ひとつとくさふ　よ揚のおしき山そふやとひすくるとと
の縁や　河　霞カスミ　山中に案しつくさしや
かくうしてあるの鳴をとやめていとまもなくしあまた北山ある
ときそさんハつかんといひわかりていちもいとはし
よ揚の扨のと思へる秋のこつハ治んとこるよ揚り鶏の声
ときのてうきつしさにすへして我母えの声ときくさしんこれ
つうるんとこひわかりし給つる也
山墓
山まれはるくと鳴声さきハ文りとせこふ母のやうこそなきよ

細
引さうゑなへくしもまの音を申すて母とさへ出さうかむ衣
なり給ひときこゆ八出家の間りもとふかしとや　又哲の僧を云さ
僧あてわらへぬへなへくもとこたへぬとや　又ひとまさく
人を見か々もこれとや又ゑすぎうなる人
あさよう給へるたりひさの人をいとく見ねるくりやなしと
むつりしさてとくをとまてもやしうあれまへまこくさくうし
かせるをとふりさて出でと　大臣云ハそくしうさ打きてゐ
哲り衛あると築れとの給也
まうちひをいとねつきるくうって思しぬこゆちして
大臣公のさうまうあつもてらうさなん也
あやましうきちんと申さかしひ給と　又哲の詞をと
くるなるて給つり
志あていかもいとこちなし　大臣公の比おその給ふ

いでむとくしおなとや
まにくしきほうしさうあをわまくさもて僧都云ふおほ
くさまを給ひくし　又詞のたしまりあるへし
あそきあもらにいとふなき達ほ　僧都下山あるへきよし
とりつや行とて衛あをくてり給ぞと問也　細　ひとある
人の使り問也
一品乃宮れ御抱のをたいやまり仕給ふ山の座主法も法つ
うらまつくせ給へてとなん紙僧都築り給をそくハらうしあし
まそるの二たひなんめし給りし　御おは中宮乃御
勝女一宮乃ら事也　私　法師の僧都乃下給へ云子
勝をるや
大臣殿の口伝おねよく思ひきてあんの御かけあつかまし
夕霧は自らの口伝お将乃さまや

后乃ミやの御乳母なと侍りけれは大弐三位と申也
式部ハ御名中宮に申也
いときれやうなれひなきと　下注 式部の事とまとく
しくいなき也　細 式部ハ両局也と云り
まつしきともおひく居よおかし給てまもなくん
よ賢子の也式部よりつしくとも何ひく居よりの
歌人と此歌きんと也
たゝしき人をとくなくてまれはりけて我ととへと
尼云 初瀬の翁なとま申と云る如し　よ詠大尼云
折あしく御ちれいとわしくのを待ると
りの歌詞也
式部ハおりさせ歌つくんまいりとつきを待へんと云んと思
侍る給さやうまゐの歌人とうるひ給へき様きくく

まちうけなく　細 大尼云 紫式部女也
御れるふあり〳〵なかきハ尼君のとまつり歌とゝとくよ
ふま迄させんとてそておほゆへにてつる喜たしてなるよ
まけ人なきかくしとれそしてわやよいと一方ひろなる
ちのさゆをとみてけるりなんしそ人やりなしもいとされ
しなれいくそうひしきすやうこともとくしおちなきり
すりあるなちとう迄とたすかなるをとすすへをいとおく
てみ人なきりなるすなちとうけくしいるとあるをもちなを
をとこさらへにけくしきまり　よ詠の家なる人まうら歌
根をとく云り
うき我とてしるをひとつとて此の歌つり
しいわかしあるほよめる也　後撰 たらちねハかゝれとて　僧正遍昭が
うはたまの我黒髪をなてすやありけん

暮かゝるに僧都物し給へり　僧都小野にとまり給也
みすおろしてきちやうのひまよりかくれてはべると
まゆきちらひさしにあるも　僧都ハそれをたてゝある
うしろや　細　弟子ハ法師のある也
まいりかゝりていとゞ行そろしきにもまた　髪あるこ人
とも手習の君を見るれぬ人也
ちりれはかるに参り給ていかにそ月ころおはしまする
僧都の妹尼云の人々かくると給也
東北法かゝる人物なりてし給ふまとかこれおもくしく人かな
とおほしゆやるとといひ給ふ
やく人まいりけと僧都これ由翔也さあらもしく人とそしる　僧都の妹尼云なま川
手習のとゝ給也　細　妹尼云とは東のうさと云なるし
さらさらにとまりてなん心ちわしとてそ物しく給てし

さとうけたまはんとの給へると也　尼云此世蒼也
手習ハうちに侍給ふ尼まなんすしとの給とうち給
ふる也
まちてとうきにはまりて　僧都母尼のおさをさして
手習のうき人々したりしまはとや
さてすやおもうしますさつて几丁にあこれをみにおはしまする
僧都は手習の給ふ也
法くまし給れとみるさまよりていひくしき給ふ
手習の僧都にあふ時の心也
ふつかくるまなきそ然なめしもはなれ人たゝ昔の契りありけを
おもふと思ひ給へて法のために給んにつけはうかう
まつりしを　僧都の詞也かくしきに宇治ふくさ
手習を見そめしも先世の契りますやとと也

法師ハそのことくなくて古文字にもけり給ふらんとひん
なかれも志給ふりなんぬるのなきやうにもなり侍りぬる
俊部此詞也出家の身ゆへハおしまぬ身なりとも此身を
又なきことなるのもかはらぬとの心也
いとおやしむ給ふ世のまもむき給へる人の後あさましと見ん
みておりしまれなんとの給　妹尼公のまをを俊部
の給へり
世中に侍りし也思ひうち侍りしかれいとおやしみそて今
まして侍る代ならしと思ひ侍るなり　手習の巻の
男ともなりんや也せし時の事也　細同
よ給ひけり物せさせ給ふ給ふるはらをくをなんいなうひなれと
ちなさも思ひ給へなくの事と　俊部此わけ物語なし
給はんも人のことを手習のとひし給ふとの給也

なき代よりかくのことはゆるにえたとまうるまししなとそ給へつるなと
尼りなくもも給てよ世中に侍るとも　まろを
うるくしさの心也世をふるせしの義也
またの人かくなりしかくも侍らぬこになんと申す給
思ひ人かくハなりく人わいかにと手習の給也
まさいとゆくさまなるとを尼うる給けり　俊部の詞 細同
いつてうハちさ尼りしもうたおほしくんくりて法とあるを
めとなまつと　給とてさやうにひとさ尼なる其出家をおもし
めしさ門そやむ也
思ひらて心をわらし給ふほとはほとくおほせと年つき
なきハ女の法身ともふ物　女のりくなる尼心なく給を
まどろしかる物を俊部のいさめ給ふ也　尋とく之本
のまをみとも云りとく

たいくしき物ならんとの給へと　式部の詞也とあり
らぬとの給也
ものさなく侍しほとよりも物とのこゝちへ人なき宰相まて
宰相の君の答也　細同
おほかたとも居よるし二条やかんまいるとなんいひの給し
おほり二条院より母宮の宰相と居まゐるさんな
といへることも也
ましてさこし物思ひまさり侍つらえて様きまつゐの人々は皆
あらて様世をすてにとおもふよく侍りしを　紫式部
さとりくなりてハとの宰相の君をたるや
なくなりんとほとのやうくちかくなり侍るまて心ゆゑのいと
よりくの故に出待ゆかを　宰相の命れ旅りやうくちう
とやうよの給ひなほ也

なかいりてとゝめかふちみまらくめ給　居なかしてよの
んとあり
あやしのとゝくはかくちら宰相の君とかかくてあとのいとうくれ
まひてしめ給ひん　式部の詞也宰相の君のさしきさ
らさいりてさうみりさんとの給也
物のまをとゞりそいふなりしも思ひあてもまるに　あな
いのちもりし時物のまゐりて宰相の命をもとんなりと云
しなを式部いふ也
さるやうしきはしめ　物のまをなとの給まて居よなかん
とく文いひやられはそこの式部に也
命ともいさたりつよ人から　宰相ハとしこをも命を
なれ人かてハなかうしとの式部のいふ也
あいさ物のくつきをそめかうたいてもそろしくあやかるを

ともとおほし言　悪霊（アクリヤウ）のつきたるなりや
とまれかくまれおほしなしての給ふと　信抄比也
悪き物のけともの入かはりたるにやあらんの給ふや
ほかならすかくしかり給ふ事あり　出家本意ありし事
されはかゝる事也
法師まて出家の人にものせむとおもふを　出家の人にて
さえある事なとおもふへきさまともなく候や
清けなるかへてもやさしくさうけなる人にいは　信抄の詞也
たりあまんそもやもしかるなりや　細　さまて信抄の詞
きこえなれと思へくまゐりてたまはり　細　云清けにて悪たち
事あれなや
ちかひの比宮ゐ来る人くるしからすやなと清らにしまう
なく侍らん　御息所宮のすゝまやかなるとの給へり

七月より一条の宮はさらにかまへるとの給へて　一条の
宮の御息所の祈禱（キタウ）に七月八日より有人ありけれとそれ
さてくのかしこと申にあはしきかしと侍部の給也
のちには見まうしあらてなれともにさうきてかんとてはな
しかて　初瀬より下向し給ひて小野の御息所のおはしま
すなとかきつけ侍りけるとの心也　細　小野の御息所也七月
色はた彼岸より還向（クヱンカウ）ありへしとなり
みゆるもふりあふしほとにきこえけるやうかくつとそる
色に侍る　小野の詞也おもふふちけるし時信抄の
たちはしやそにてもとならしとふひかし給やさへちなを
まゐらせ給りあはんかゐなはすかるや
おもくあらかにむかしかるゝや御かんかとえつきいまより
きこゆとてて思ひ入つまととてもたえしもちなたふたくとひしる

思はつくらしくさまく　さなり思想をかくすにおもふを也
の儀也或時ハ五戒をたもちて毎日三さとれもほ経のんをも
能やもとをぬけんよりおもてはなつて　双　信救の詞
昔より こくもとよふ行へり道行りしを弁えおもふまして／＼
それへおくくわれハうちやもとして内すへ来らんとを待ちと
まり拾はつかくたま道ハさしつはらきさつてんとの能すは
信救のよろこむ時こ山よりてくら給うつもおつくほとも
思ひさだめし子今ハよくもひまを給ふとの給つる也能を心
きこれたしと只ハやもとくて行きを禁中へハ来らんと也
能としへも思ひをとうもひ居ますしなきらんとれ哉也
いとう猶しくありぬ　もの思の心也
ききとおもひてくしれたとのすさ行しいそてきはいつつ去
もとかららにとよ　信救のよろひ出ぬと也

さしめたつまたそてさつりしすてらもあつしさかんに存なれた
よひつまて清をし行つて来れとよ　宇治にすてよ
思ひをとうきしおもきつまてを　信救の法僧也
まふけてつるさしく人の法有様なれた　行光撰集の心
也と思ひを宇治まて見なりし所をうつの人まてを
あつりしは出家し給へんとありても地のみを尊ふと
ハつるや宇治にて八変化のものと見え也
さうし人めて世をおもそでんとふくてそておあめとこれは
光源もとたとりとにえつり　弄　女房のさうらはでせ
すき給へんをとよういしと也　細同
九丁此うちひそかのほか給ひもうはからをとろかし給へらう
いとおそらしをれうしきをみうにおんまうしきさくとも
てやまもひそう　もほうハうらぬる給てたへつくさまらう

さと来てれかへる影もち出し給ふさとつゝり。
かゝるほとのかねのこゑをとゝめれる宮殿のさまゝにあひ
あまりよにめてたき　細 僧都のはまた給へとおもふら
つれなや　かねの声のすれおもひやおもとゝへまちゝと
すゝみかゝるや
女房達へ　女房達の手や是を僧都乃修行の中に
まうへ思はれそれとかゝりて御寺のおほんつゆさ
急ぬへし
このわたくしはさるもあかくかくいふへしと奴とて
忍 あるへくのさしあたりて心もなきれはこのとかう
かゝる所にはまへてはみなそゝくにかまをれへくくめつらし
あまてゆくきたるを　小やきれさ海をとこうまふへきを
まれなるをへめつらしをもひかくとゝかゝくに扨をとよせ

そうかきかり
そうれさことをけ見えつゝもなましくかう經あり
僧都乃あかしれるおきあかして御寺のおほんおもひあ
ぬかうや一献と見えゝうそや　忍 そうれおなるかたきを
ゐてと見えゝうかゝひあるとさうかや
おもなひとかてしてかはてさんとかねの声ありはてきく
里なれたきとひゝく所へ見るに
禅氏おまかせ給へしとのことゝ御持尼ありき　壺 女ひとりよ
あるや
家人のさぬけさおほと所ゝきるとやうてこさ給
ありつきて　僧都の衣加裟後衣とも御さまをやさしきや
誠実なるさとそてそはかりはとのふかきや
紙の法のとわくをまうけ給へといふに　出家の時乃奉れ

んなるへし

いかさまにもしてぬ御ともなんと無ひなく成てまいらせ給

すなる　玉鬘の尼君の母君のまいりくるをもえなむ

源氏をたのみてうくやうし源氏の君の御むかへに

とふらひきこえてもいまひ源氏のいふなし　孫　玉鬘

のおほえ右いはくそのかしもまたひきたるは義

隠なし

あるまじきやうなりとく　細　御待ちたきとの義也

いかゝあらんとさいはいをさしたる事也　無喫(アンキ)也と案したる事

也云々也

此人は御ありしかめやすくかゝれるを彼の源氏をたのみけんとかやう

ありしに志そめつるをいひしるへしと　源氏の義也

其次にも御もとに志て侍らさるをいひさゝやくさまし

むかしの人をいさめ給也

物しきを思ひたく源氏いさめ給へと

よろしくもえいさめさせ給ふ　源氏の心

　御物語の心とそ

流轉三界中なといふなもたゝそのさし物ともちいひ

いつるをもさきとりなりけるを

沙弥のすれともさやうにもあらて来れなてこまとひ

　玉鬘の義也　玉鬘乃尼の

ありさま人はたゝや恩愛(オンアイ)乃名は弥(ヤ)をそへ物なとされ

義なと云々

河　流轉(ルテン)三界(カイ)中(チウ)恩愛(オンアイ)不能(フノウ)斷(ダン)棄(キ)恩(オン)入(ニウ)無(ム)為(イ)真(シン)実(ジツ)報(ホウ)恩(オン)

者(シヤ)云々　花　恩愛の名をと云也云々

弁　不能(フノウ)斷とかつてゆくゝさや彼やるときとも思ひ捨て

ありやと云給ふ義也云々　細　同之

清きとしをともそゝかへかへりてのさやうに尼君たちとして

とさきを行へとりておさへいても信都そろへ給ふ
桜も静かに居たるうちよりさき雨とハなれるとし行へ
とや阿闍梨なとかくる也
うらはかなくち居りし給ふくらひ給ふあまるやたるとなる
ともとなくさうも給
行るとや　細　信都乃出家の功とも説給へり
ちとにせさ給へくもなく皆ひとしや給へることにて給へり
くとしはるかれと　御前のかりも兼家ハ居りかとなし
給まりしなとを居らの毎もたは給ふまことに拝しく
也給也
これのこそ仏をいきるとあるしあるとそ拝し行ける
御前のかりもおはハ仏を初しとは給しとありしこひ
しに居り奴給のことハ仏のそるしゆとも自給とも大命下

かたるしや　平　義経そそのこしらひありしかと
こはれても其のこゑきこえて　細　仏の利生ハ其のこゑ於能し
毎るらむ也
みなくこそ申まつりぬ　信都なとも皆へ行なく
申しまつりたるうしや
よ給の風乃吾ふこ於へくハ此作きもし毎なとも申
しのことも　かね御とうつる頼也おなく此風の
書にかそうくるともひきしふるかひておるう
し中ね居りおひ給ふの文作しもへ可能縁かとう
をかさるへきゝみてこのことはるに何さまじく御身
居ますしや給こととにとある也
今いとめてたくなり給ひぬんと毎のこゝ出しつる仏
あまりく申されさを行てのこるを打はるゝ御世れをたへとい

くたさせ給はんとおもふ給へ　孫　中将をハ必めさせん
とおもふをさいはひ也
むかしの人ゝゝに今ハこまかとはひとそへて給へ
かね尼君を辞退と下心あり
いひそへられて　清濁いつれもまきらはしき程あり
尼は姫君の心とあり
いとかしこきわさに侍るとかひなくもあれと行幸ありけ
なにかよくまつしき物とおもひ給へぬる
しそれいとめてたくあはれなるものおほかる心ち
そし給ふる　御答の心也　きたなき物とて思ひけむを
かくハかやうに草木にも縁あるをいふにハつき
て見ゆ侍らんといへは院ハ尼君は姫君へハひさしと
なる御子もおなしこゝろも侍るとも　細　御答の心也

はとめてたき　御答の心也　尼君は姫君の御心の也
さそとなく人のゆるさぬことをかれたるかたくなゝるみへ
ひたいとすこしこもりきつこれとその縁より御らんせさせよう
なりとおもひなくさへそれたるもつかしおとしいひて
はくるらん人を見れと　御覧をまてる
御その日たつぬる程也　髪をそるさ
なふるにつきてもはしまして　人には御答
の心也しるしなとさり
くちをとり山寺のちかきに　奥深の縁なる所の也
人をとらせくはしくしてかへりける也　細　人をと
なちてる也
やすけさくるゝをひとはかなくおほえたまふとかく
しるへきをまいりてきつくしてとかへきんさへ御けしき

見ぬ給ふ　　よ詠の歌も思ふ如給人を母天あとに行ひ
字まゝの心をこまれの限との儀也
限そや云ひ如かし世中をとへきくをこむなぬ給りる
同云　行あしやうあるこゝとあるをよめる所なやと云ひ
の切たる時たくるに物ありや涙はをいの式アの聲は方る人
したくこ氏歌を限そや云ひ如のしとハおりりあと
あをしるりをこり返くとあるを出紙詳たつとのみを
弁　弐あをそ同歌を後給つり今た心を限りの義をもしぬ
おりなる人しさま斥羽ふを同しすらるるをと
こりもおられやくこそ
行るのしすちのるりとこくぬもさひ弁給つるに中物の
浅又ありの物さりしをゆされあるぬらしあへる行すて
おの云もと同し歌とこる儀也　細　同むきる云とも

さたくまくつまにむつひくよあまる行りへにひとつくひとのこ
よ詠のみやまうてと云若きよあるとましてこゝにハ
云とりる人こさんくをもすれよしや
字けむるとよくく云付給ふ　　きるわさとて字に云也
なすれ物りしかとも人ともも云ひつをそて事し世と云そて方し
に詳つる　　よ詠云　　あとあをしこさりて名所か
しくるしくんとをもりとすらつわりあとをも詳むて有るこ
の義やさしふをつる出へと又所は如給人を一たひ方を
あけて詳しるも紙行をも詳たるとの儀や　　細　よ詠
其の一生や方をとも人域をもすむ物に云ひ詳さるとも
秋　よ詠人ともと使りわるあと又を誰とをもこうろ
とめぬるしや
今ハくこあ限りつるそつしやつるそてを詳こうろしとをこ

くるしからんといひならはせり　又　上﨟の局よりしもさま
なるよしを中ゐのうへ人云なるへし　案　上﨟の尼に奴
路まさへりしな秋とて在すもたすけらしをお待
尼たちと中ゐのうへ人といへるや
いとあへるし山さくくの僧への御ちく有あるへきりそれ
也　又　中ゐの人
そうれなりいへるとしそ覚しと云ひとなるをやなり
同心也前も中ゐの名るなりを上﨟乃表路ハ忘りし人
出家のちを着しにものせさりしなり
忘くもあへるにわさの部いと初りしを見るとしるこれ路
をましくにたちをもと一種とかうしひしるにさるへうしんお
つましといひし物をとくち初ぬて
り上﨟の形を恠見なるしをくるもめしま仰おす　法名なお尼

私初すくゐし物をとやなり
立くるりやすらんくもなれハ　やすらんくさなれハとちよ
つき中ゐの使立はをとくし且た名うしの御方なるへし中人
あやうたれと出家の名をとらり　細　文の御方也　又　中ゐ
のくそうつきまくらさ私文の御方也
名をくさきえあうしんわさのまのうをくれしとらそをなれ
中ゐ云　わきまへとふへるにも上﨟の名も奴路ことと
こめより中ゐとも出家の名をあれハよくもしとの人也
細　武士の名也
まいあるもとそりて見路　あくハ中ゐとをむらしくます
云ひ文名をと見路ハ忘りしくもや存よ奴路へたんやをそ
らそて見路也さま庄在すをとし路也　弄　存よ
奴路つきハ中ゐの文やとも天し覚くら路也・私よ

頭をと見てかん給ふてこそやのうしあつかなましと思
ふ心也や
物の哀なる折は今少しも哀なる頃物うくおほさ
るゝにつけてもよろつのくるしに　いかの心もせとのゝ
れくもえあれは物の哀なる折とや也とらせ云かと玄
なる物うくおもひつるは比の事也
御そうも其れ其をもおもへれとゆくへともしらてぬあさは　在
よ野辺　あきしそ世の中のうれ憂きとんへともなと
色ゆくもまたは気安ものの人也海士のうき世とは舟也松
風をみとおもう　細　浮木ハ舟也世を経とてたつと畢
下してうく世は捨られとも捨たてかるましきも
よしまたの事なしひましけるかは世にて在よう
よ野れるとおほろ見るとうとも思てゝめて中将の

うき人はとふらひ給ふ也
うれうてこそ心をもふしても其の給へと　剃りたまふよし也
とよ野れの給也
中くうちとこあひはりあんとて歌の心　あまり
きうはしあとして八中くも苦しきは何しらんとてやると
あまり　ひ　おほろうさる也
めうしるみとつふかれくうすし也あんおほしめ
中将の心也よ野の在原を見てくのこころ
物まうて人のかみの給て思ひたる事ならす
在云初瀬より下向の事をそう
く給あみくへもくみ中のうんしてとあかし偏住とのこうと
おほうち男をおうて給ふ給ふんともえんとの也ハ世かはう
むつとくみ何をとをもいうる人なうてうろやまくかなを

さなきんとよろ川けふ給へくてそ仏のをいのち宮へ道
とつまろむけいとゆかしきにふ給へるに
詞も秋も出来きれとも女郎花乃声をとゝめんてく　広文の
ハ云ひあらしつれしきも
まことのおやのやうてくるしとあそれ抱とさきらひ給ふんなと
よしなきそまけいとくれしくきをくり　女郎の人也
承守給ふてとも投し時すき文の秋のつしき人あけ
思ふひ給し仏を品今広云乃すゝ道とうるをとゝめ
りきゝ広ゝあすうくら御前人歌給さ海ふて文の
秋の人をとあそしゆう給とも　細　むさ哀也
道いのつくへとせてそむおの給へるさ海いとかゝくら河く
しくられて　女郎の程も広云ま道答あられるも
いと抱きられくそおつしちるけんあれとたくらく叶それと

あといふ文給ふひとをよまれめしことたまへ尼こうち
きあさるよしたり　御よ聞の人乃来るしゐやくのとき
ろゝ心あとおかしきと広云たくゝ覚そらるゝをと心ひ
付るも広云あれて哀衰のこゝ従よる也
ゆかしくとゝ成るをとめひさきをあまるにつきくといとおほ
くれう行しおる山里のひかりとも略吾乃人まうつかのを
口行しおるかりさられと　かね乃尼をとゝめそれるも
ゆるしくちくて便数をとうしくそしつをくり一不定の法か
やと　女郎の広り奴給とわしく思ひも
ましくの前乃れいのしとまるくうちまゐる幸しもあつそ
とこゝしせ給ふられて
あり法師だらうの書
の息四位かね便数の法ありし山へ登りとゝひのしさ
まさ律のとまきく庭をれくるりて　かね給し給まさへきる

一 しまひより伊勢の御おほえめでたくましくありしとの
ことなり 河 此歌を御覧じてことに伊勢を
ありがたくおぼしけり
いよいよ御いとほしみの深かりけりのひの事 細 伊勢殿と
あらはしけり
名誉をあらはすとて此歌の人々を感じあへりしに
一 かくて今の御いとほしみ深かりけるとて名誉の始め
て
伊勢の御かたすくれたりしかはやかて
しるされてみまほしく思ふと也
よろこひの伊勢の御うたに伊勢の名
よ井 河
良居 二代の后なりし
日の本に人にすくれてよろしきことを給ふと
女房達みな一品宮の御方に参り

それより御かほのまたなくましませしかはやんことなき
御方也 中宮の後を給ひてちかく御うちにいらせ給ひし
に 中宮の御まへにまゐりしか
御うしろにおはしましけり 母后と一品宮と同腹の
中に於いても一条院と云説あり 又一義に伊勢と母后を
かくあるへき事にて 細 中宮と
一品宮と也 弁同
昔よりの事を知りたるにとりてはいかなる御心を思ふ
ことにはいまたしらぬとなり
此の中宮の御事也 此歌をひとへに一品宮の御事と
みえたり
世中に久しく伝へましき事を 伊勢殿の歌也

細
僧都の詞

紅葉ともをし一條の事とも侍らは出しらい孫んを
申し〳〵をやしはきん侍りされは法をまゐらされたく孫んし
侍とめ給はんとてかくこの日の上侍るを
紅葉ともをし一人給　瑞相(ズイサウ)おありしも何ごとくはあらす
かく給ひ侍りせるすこしまかり出侍りけりしか事ともまかり給ふ
中宮より頻に召ありけるによりて下山とも
法師のそのまゝ給はことゝほかくはあかのこゝろかそこらし
きるゝかとの給はせてり　此物のきゝは世とはれるよしを
僧都の中宮より給ふさる法はそては思ふのことを
あるも
いとあやしくけうの事をなむ見給へし　此三月に年老
て侍る母の願ありて初瀬にまうてゝ侍りしかへさの中や

とりに宇治の院といひ侍る所にまかりやとりしを
河　希有事(ケウノコト)　細同　河　僧都詞あやしきことゝあり
浮舟のことをいひ出給ふなるへし　花　僧都は浮舟を
宇治にて見付たりしを深かくしてとも
かくのことく人をきまてやしろぬつ大なる不思議をよろしぬことの
うつくしきにひきてうきを病しやのためあしきさ事
とりやさ　宇治院は人のもちて侍りてと云也平等
院の所を云也とあり
之の給へしと思ふことゝて　よからぬ物のやとりもや平
等院の住侍ると母尼君まつらひ心をそしと思
ふく金葉(コンノアン)との也
このついてをたよりてとくもを申出す也　もうち宇治に
て見つけたることを申出すとある也　弟もうち一元

きしるす此書の始よりかきしるしたるはかくさて好也とこ
ろいひとめつる娘にしかれどもちかく侍つる人々にこ
おほ殿へまゐれる時おぼえてなかにおもひさだめて　御前中宮の御也
おもとうなさせ給　女房などのつぼねなるを中宮おぼえ
しくてさし出ておぼえなく殿にも候ふ事也
大納言の君とは宰相の君の兄に也と申すなり
うせさせ給ひてのちに何ともこそ侍れ　道長の思ひ入給て
中宮の御めのと宰相の君は侍従の宰相の御女也ときこしめすにと也
弁
侍従の宰相の君をさしてつきたる人とすべし
てもとの思ふところを宰相の君とをいひさしけり
中宮との物語をきこえて御ちかき宰相侍従殿の
ことにまうしさるゝなる君とよりさらにさしはなと也

その女人此たびのことのもと也　侍従の宰相の女なり　この好みなるべしといふ
まうけ給ふるにたとへばこの頃は御めのとなるべしとおもひしるらめ
ひめ君んとてまうけのあるたりしに
しかるに宰相の女房入道殿の女房
なくして出家し侍れども是まで何につけても侍るべし
まうしつゞけ給ひてこまかにことなる也
この好みなるとゝまりて也
大納言の君の母の御めのと也　北の方の母
いふなる人しも侍従殿のもとにありて小少将と云の娘也
うせられし後は侍従殿につきて思ひ給へりてもたいして
んとする人もみなこそ侍るなれ　左衛門の内侍なる
侍従の君とは此君のことをいふなり
かく好みなれば侍らじを見るにもきこしめすもの也

しくみゆらしかくれとなん思ひやりまいらせんともてわたしありし
あんゆしけ人すゝめんと描きて信経よりてけるを
やさしき人とも　ものかたりはいとほしきと云也
いひてゆるしやりける人とはしともあそてすゝろん
宰相兵乃詞也さて頼みとへる治乃るも也
ゆうとも今はさして逢ぬらん事と此宰相乃兵衛ふ
ものかたりとしゝてやさて逢ぬ人へと知らんとの御也又義に
非ともあひぬる人あるとおもふやとぞろんあるへし宰相より
詞ぬくし　又　非ともあひぬる人あるとの心もふやと云らんも也
さてはさまやうてひ侍らんさてとに逢んてとなかめん
あらんあふかひはれも侍らしとや　信経の返答也
さやうに非ともとふ祈りてそへらてかめとれ義也
さてまいらんと云る心をかけてさまやせとゐる也

細 信経乃詞也宰相の君のまいらんといふを今はきてまいりぬらんと云し
ひさしやかにまいらんとさる人語る也　弄同之
わたらん人の心をとめむとゆかしき事あるにてなんあらめ
いみしう田舎人の心をとめむとおもふ心はなくしきはおはすへし
の義也さりとて田舎人の中にもとまりしは人あるとや
つらい中より物も見れ給ひてそ侍らめ　信経
乃詞よくわかきてゐる心也好女嫉妬のもの也畜類(ちくるい)
の中より仏性をえたるものもあり田舎人の中にもよき人
あるへしやなとゝいふ心也　抄同
をなくみゆるはいとつきつきしきもの人はまゐんのかた
あると思へし候　細 無(ム)名(ニク)の人端(タン)正なる人は生れつきも
その位々にわたりにさしいてたる人なとおほしけれ
中宮の御心也されはさるにたふとき人のあるなもよく思へきなると

おぼしめしけるとや　細　かの舟のことなりける人々とし中

宮にひかれ給へり

　小宰相なりけるや

これおまへなりけると

わが君のほかへはおやしらせける人とは申すれは

そまりけるやおもんとは思へれと　小宰相のものやま通盛

大将君中の君乃候すても通盛なるをとよく申はつ

ともおやしらてうせけるへとはくも通盛なるけるへし

弄　小宰相姉がともとこと　弄　中の君なるもよも申しけるや

小宰相が姉う　細　二条院よりれつる人也大君と式

うはまてうき給へしさやうなくともおるべしとや

きめたんれるやや信部と　小宰相のものやそまりてとふ

宮のはしくくや

うれへなふおろ給ともえつくましと　信部れ綱也し

琴の事也

ようもおしぬかくれかしたかくへもおりやしれ給のむけ

てかくし母ひろのむ　信部れ綱也も琴を学ばける

弄　物ともきてきてやとりともやおもとのくまでいへらし

名琴の方を射して敵（カタキ）のやうするへれおりをれおや

敵退（ヒラキ）敵母はなりへかうもたてよりしは思へあもと始す

あるへしと　細　月給かれかまりかするすとや

と信部をとへくし給也

こやさ後のおやしゝれともうゝろゐりやおかくれ

名かおなれと　内達ともる修まおやしむ中宮人

信部の琴れるをも啓（ケイ）しまうらそやとや

人あとくさしこ　小宰相の人はくさしぬるをとろう

段　おまおまへたゝうへもともそまりやおかしと　かしつ前若

来りあふ

宮ハそれにてそ御返しを大将の中の宮をとりやとおもへすその給
ひける也と　　内大臣中宮亮信部卿の給ひつるにおほしたる
思ひあはせ給へしてあまりにをかしとて也とおもへハ小
宰相也そ返しとの給ひあはする也
いつくにもかくれなくおもひて給ふてしめてさふらんとも大
らをたのもしうてなつかしうさふらふて給ひてさふらんとも
清まし申やうにて申やう也　中宮大夫也信部へ
かへり給ひて也返しをさしおかへし給ひや也又是
も中宮もとへ申させたまふを給はるなれ共ハ懐中なとも
文にてえ此宮なる是ありし風にえの給ひまうしを
まハとや給ひとも申させ也あるへとハ是也
帳家とこるさへてさせ給ひて信部卿との御返り給ふ

一　承宮内給まうしきたえ信部卿も山のかへり給ふ也
そこたち給へ返しハかへりしてまうしてて　信部小宰
へ立よりたえ居云ハよ返事を居てなしとて相給也
中くらゐ源氏の相給みえ清さもえあつかさと此の給ふ
もかもとはなりにあるちとたんしとあやしとさる
やの給へとのひなりし　居云の詞也よ返事をとやう
よ楚忽(ソコツ)よ居りなし給へまうりてハ信部卿此事とも
あるへきをいひもおもきを給まうて居りまうし
給ひまよと悟給ひとの義也
つまりたく内行となりひをとし給へあつかるわりなくうるため
あれ字也　　信部の詞也
あれさ給ひしおもひしうりあるともちとかりなる内方を
やとの給ひみとも　　信部卿此詞也よ返事此おほよあるをと推ん

としけへともえれたまて今まて思ひ給ひつるかなと給

みちたる事に女御給ふもことゝわきまへ給はるなる也

弄

手習れ心の世れとあるしといふとかう給へりといふを

まつりし思ひ給ふ給へんむかさし

細　阮宗治ふるまて

さんとふひし御方あれたまひ此物にいひまいらす給ふ

理りとも也

いとまつりし思ちさんおほしまゐる　手習の心也

ひ

おほえおやしなひさ女とよりを見入て給ひしるか

清涼の御くわうとよしいし給へとてあやうきを物さぬるを

いふ物なまりをとみえ給ふ　僧都此手習ひ清服所

さしくく住さてまつりせ給へとてあやうきぬると思

ふすなまり給ふ也

細　僧都清水院にて給ひ物とも

たまふへし

僧都此

まかりし給ひし所のはへてまつりちさん

あらん所は手習をとなへくまんとも也

なるかおほしまいるへしまつ　僧都此詞也所とは

何事もおほしめしいつくしひそかなる也

清氏の世よ行ひなるくにるの業花は福のひまにいるくほと

あらんにやくもそれからくあゝも人もおほえさへあるなる御え

やしれ中に行ところかひはとめ給へんかなへはこるへらし申し

思ひをこゝろしくともおかしはつき　世はせられてある

く給ひそこつさゐる人の五れしくにかなるそてはのや

うよみるとみはんのまことふへえ女たちよね物ぞ也

みやうに林の中にて手習の方をとう女物とふとう給へは

真ニコトの言知識ふとの僧都の詞也

これおしん命は薬のすなるちしくやかひさしそせて

僧都の詞也葉のうへなるしつくハ陵園妾のなみた也
文集ニ顔色如花命如葉命如葉薄将奈何とこそ其命下と
云ハ物思の為にさるゝとかくるにハ命もあさはかなるに
よそへていへるなるへく思ひくらへあるまや　弄　同之
細
陵園妾顔色如花命如葉とて思ひのうへにさるゝに
いつはりのなる世にはかなき身なりてかるみつはものとか
松門りに暁ちかつそ月徘徊也　是も白氏文集に
おなし句のうたよみあるも　松門至暁月徘徊
弄
徘徊とハ月のめくるをいふ也陵園妾ハ宮女なりし
か思ふ事もありて陵園の女と成りてはかなく
なりし人也手習の小野にすみ給ふを
細
陵園妾の陵といまさらしくあはれにも思ふ人をおもへれなり
ハ御かなしきなる也

法師なれといとよしくしきをあるつゐにてての
始るをも思ひやうにもひきかへしをとこして
手習の君也僧都なとやうに尼君よの始めをと
うましくやみなる也　細　手習の人也
法師なれと　僧都ハ伝法なりけるをなすやうに
風流なるかたをも知給ふまとの事也　孫　おもれ法文
かるにいひをも要領の事也
とかく思ひもえにし風のそとよりいとしのちにそまり
手習の君也ほのかに思ひ入給ふ時ハ風の音も哀なり
河
栢城盡日風蕭瑟　同文集　弄　陵園妾栢城ひよりも風蕭瑟と云ふ事によりて云り
おかしきある人ハ何事も山ふかきハ谷日ふかくこそ音ハたえかたく
しきりにとやすむて　僧都も哀なる時ハ音にまかせてこそ
とのおもとも手習れ給ふくの人也をかしきある人へとそ僧

能のなきや　弄　出家なるともしろかなは源氏などさぬ人也

細

山のかれ方へかへるしき扇などを何とも思はましことの代

名のみ人のうしとも是も栖城緑目風蕭瑟の句もて代

似非陵園妾の句もてせり　抄　僧都附

我もとは山のおくにそうしやうとりかへしとまうしぬ源あまりけるをと

思ふて　手習の心也家も出家しぬ人は山伏と同心と

の義也僧都さへある此行人へまして身を理くし源乃ごとく

まうしぬとの縁也　細　手習の心也つての詞みかく僧都ハえ

や山への分り路と見るべし

あしれなる人立出くこれを　手習の種也僧都ゆかり路

際見　弄　僧都ハさやゆかりぬと見えて　細　也

あしかもとは

まなりのあるのさえまりをうりをぬきくはくまたちまし

あまてみや山への内るへ也とあるところこれ存世はつるかふ人こと

ともあさる也　河　声のうれ橘寺に谷れ寺陽とありき

是に同也

くろ谷とはみえるとありて法師の跡のくまよく見

ゆるを　河　黒谷叡山にあり

彼のまとくとこうきたるハあはれなしめつしなんこの僧見ひ

中将なりけるを　手習の心也此小野ハ一向人倫絶たる所

みくあはれ撥素来なるとききたる人とこうまかりぬゆへよ

例の姿とんなる也不思儀の姿と見惑かぬ成ふ僧れ

姿ひろとの心也たまたま中将のまどろみめつしき

さふらし也

かひなれしとといふんとそやしたりける代　中将の心也

手習尼ハ此行人へといまは甲斐なりけるとも程ぞ至

なかなかとハちかくて参まゐるやうも也
弘徽殿のいとおもしろくほのかにうつせる事まて書ましたるを見て
哀れを入て侍るさそ物哀なりける　この弘徽殿の此
気まゝにも猶あるさまなれハ一入哀なるとの中将
の心也
こゝにいとかしこまりたる人とこそ面しろくおもしろくて
おほゆへきことゝ思へし　中将の心也女御のやうに絵なと
人なしておもひえぬ人とみえくハ弥あハれにおもしろくて
細 とのゐ人おほく中納言とゞめて心ちとこゝろの心也
絵をうつれる人もさく八曲まゐらし此女御の見るやう
なる人なしてのとも
いとさきさくはまかくする心ちし侍るにも弘徽殿なとに
にとにも絵へてなん　中納言すこと申けの心ゑさる詞

也弘徽殿にといふハ京よりの事也弘徽殿にといひ中納言
の心也　細　中納言の詞也
権立給ひ様絵も見るへきこゝろをとにもそやとて只出し給
帝の御さとまゐりの浄まるめて　同詞也
女御ハ院の御絵ともにも権立くちて家に給ひつゝ
中々も弘徽殿といひてにまゐるも本気まくハうまく面白し
見んつるしきハめてたしにひのくやらそてなかめたまひさ侍也
本緒の院あり山の帝まことに也立給ひて絵にこそなれ
院の御事　女御のゝこりまさりたるにまさりしきとこ
ろしにこたへ入あそふやうさま院中納言も立くまえ給へ
ん本院も奉なりとも也　細　女御も様とかくされとも心の
とめ給へとも也
との給へて

待人もあらしと思ふ山里の梢を見つゝなほそすきうき

中将哥　こゝに我を待人ハあらしと思へともなをすきうき

面白さに来つるそのかひも下の句にてもおもむきも無心の体也

於　中将ハおもてやかうこゝろとゝめ給へとそ申されけるへき

とや

いふかひなき人の心とよとおほせはさせ給ひのおもむく　於　中将詞

ちきりありきおもひてんさりいとひきて見をとゝめとおかれの尼君

の御かたちたえとしに笑ひしましにやまとせめ給へとも

中将のまねれ給ひ妹尼姿を見てくるよしおかね君

尼りかる詞也

いるそて見るにてとちしもとの人を見をまいりしなをさまし

てそおかしけれ　おかねか中将のりせめしまてへの御詞

とみえける也

うきよのひとのおやなれにもくやしからむとおもふかたちなれは

とさていとさきやくにやかたいたりしも今のおもふなかく紀

す　かくんさらハおかの見もなれゆかうたちやうすきうたかたちと

ハかほとあるとの心也さそうやかひちハさやうなるか

ふちとともとめふ女中御とへ尼り妹尼のく於一人のうへ

とかり

かくへいもりのおつきをもちかきたかやうに

髪の末さくも末廣きと扇をひろきをるうに含よりん　さけ尼乃

てあるや　細　髪のそくれてもひろかひろかなる給ふ

あまりとくとうきね又るかさるとてとそれ扇へ扇末広ゑ（スヱヒロ）をそ

けむるさや

あちかはれもとこなつまや

すゑの世にもかくるらん也

そふたる髪あつしくとちれ

こよひたらはくしおなしやうのきさうとおもしろきさしんや
うにおもてむかひたり　　と将のかうつなはうけく見え
あさうしたるやうにみかひさうとや尼まれて南れくそ
せされらもり出りなりくし　おなしさや
われなひるとをし給ふ紙もくはなくかは凡情になかりけて
語り出とつまてよき給へる様縁にもとりくまいしうたち
見えて仏法のうくめくる此ゆちもる紙
かね尼は相を見たるひとくのくや
まして人のきも語さん男へいふ見まゆ語らんとて
お将の女月よあひらくしおなましてにおのみちかを
との紙也
ある人もなかりまや肩なん乃しいたきつのすいにあ給さ
うあるをあさしへみまさるへきなる本下あとおさ座りた

里　陳子昂けるを中将よ歌く究の此ゆりにさたる
色なる本下あらとしのきゝおかね尼よ相をのそみに
る也
いとうく色思をはしそ有しなわへしきよさ傍るりある
人とと　中将よ相をのそあらくも語りとはくしかう
んとはみうきうし此紙也
我思ふらんおやすらむやうにわしくうしやしくうれしき
きは　中将のくもよ相の尼よ奴語もと申あらしあるや
うにわしうもるまや
はくこをあつもとものられわしおまてあさひと中のもぬ
色られたのよあ　細　中将のきや　宋　中将のわらあし
くちすくさ傍よ相れさやし給へんとて立のくとや
かりうや此ちさしたるへとうしなうひとく有ぬ人ある人んや

中ねの心也よ磐　れやうすゆへとうしろめたく思ふ人も
背かじと也　抄　中ね乃御まへの不審と存じてと也
又其人の此人の心をためさんゆへ清少もことさらに雨
難しハ輙えんし者く無代をむきたる事どものつく
うく造なる人にもおもひとおもやしく返事もなくとよ
中ねの心也京にてハ其人彼人にて随分の人のしるし
めく美文其の返しあるとしてたるに難かるへき何様に
をも隠れあるましきとや京なるてハさやうの人も
河しとて只に不審しあう殊也かくろの人をと
うしろめたくや云ものの不審をしるてこころ也
尼なりとも除さ由去るしん人とそうくて御見しる
と中々見る流まさるもてむくるしめるへき後也ひとう
内さに様うしひとりてんとさへたまるやうにめてたし

中ねの御こと尼になりぬれとも其ゆかりあそしむ絶人あり
此前也　抄　尼君にて背とまいる也
よのはての御さ由すへ御得しそうく殊なるを背多んとうう
様まなり殊なるるあらんやさしく思ひなくし傷う
中ねの御将尼なりしうつの御相也其此のつるをれ尼まて了よ
其代をもちうう殊にあしてを院ま尼ま娘殊ハ中ゆく
ん也もくやうげ殊うらん更なり未宗背まししおもと也
為常此様とれ女すての時のるらんと云う　細　中ね詞
さやうにさとしへ中まし給人　少納言よ磐よ使ふれ
殊人心也
きしくとの文書に返しのあきやうに為にいるに　細
是の見うるかくにと也　放姫
又とひとりんさしもとて人ありとなうとのるなとの殊　よ磐

尼はむつかしくハ腹立給はんとて中将の詞也先少将
やうなともせうびたまふとや
いとゆくも山ほそくうしろめたなきさ由よ侍める人まめ
やかなるさ由よおほしよ後世をうらを給ふんらとられ
しくこそと給へとかめ　尼君の詞也行末心ほそく
とはゝ君のことをとらす　中将返答也おほくとしへ
中はしゆくとく中将のいつるハ君と尼君ひか侍へりくと
少将尼は心つかうる人へし　細　尼君ハ姫君の事ハれとかふ
侍らさらんなとあらん後よゆ給へし面人なとてあかふ
ま
尼君の詞也をろならんはのるすなも大事の所をとも
言をもすまに心へなくとも
此尼君もられまし人あるへし難きらんと仰てかへし
中将の心也尼君ハなにまて後のことをうちすして

姫君のこととの給ハさてハ尼君ハ親類なとにや思
龍給とや　細　中将の思ひより也
ゆくも山の僧らしらうハ命も長かるへくもあらめれは
あとをかたれとさせしもえ侍らすたゞとりなしくし
中将の詞也姫君のうしろをハあはれとらしてねともや
行ても一ハ又よかへりまゐしきかなや也
為世も給ひつなと人を添て預けたるかさやられとぬれお
あけつかれ侍らん此かのうへさうなまハ侍しねと
其心にて姫君をあかし人をたのみ也中将同也
孔　姫君のゆかりされ人なとくて家となりけるとも也
横隔あるいむし侍る人なとも給へて　中将の詞なり
あくらへなともつくハあけよしきなの姫君と給
ぬつゆるさとおしてあるも隔心ある人へしさやう

またくハんやもうらんとや

人りあうる人さ侍さみくせよつ居めつさまや身出るらん

も侍らん　居云の詞也上臈やのあはれさなれやうり

せうも給つゝもしら人へと貴人なれとや

今いうあか(ら)は思ひきるをはかり有様ならん　居云の

詞也上臈のさや尼君御返事にて人へもまれとも

行ましきうつやとへ上臈の人　細　後の世れるのと

なとゝつる様也

心のゆきもまきもさのもとりて給ふ何事とかくしひ給

同詞也上臈れんさやうにのとりゆうせ也

こなたも中ともやうおこし給へり　中将上臈れかき

みそをとゝつるゝや

太方れ世給を世おもみ思すれといとまほしうをそこえ

中将云　上臈の御さし八事といへとひ給かたに

よりて八居ままの給ふしやこ人とも我まて給ふれ

若尼君奴給へといひとひ給ふ御くれしそとや世とい

とひ給ふよをこゝ(う)事をもいとひ給へる大方れ世様人

まれとおのそめつしみそとや　細　中将の君をしく

事かさいとひ給ひへよかくまもきおりとこ人ハ我身も

うしろうしなきとや

給んうつよろしく世もし給ふ事ともかくおひつき

中将の君をも上臈はらひはそ人さうや居云の又おねの

尼まや

ちしろ給とおりし事をもくのまを世の物給あるともせし

てなきさらん事をいひはくを　中将の御房まや御返と

上臈れ気中そともかしめまをとはらくるうしとるや

こゝろならん法師なりけりと中/\くへもとおもしめして
それにおしなれといひて侍 源氏の返答果下してなるや
このいとつれはべきたりといひて急しなれは 中将の君れ
返へ源氏のいつくしかれはしなきぬとや
とひよるもあさましきことを背しかきれはらくうち給
し おり白きめると云恵のしきをといひて浅まし
さうけと源氏の思より侍へて今れ返事もとも云は
ぬ如へし
きくくち木なとのやうにそへてはなそてしまへてやさなん
ともそてあし給ふさまは月ころそつのにたえくもまほ給さ
まのとおく物ほしさすもしも 河 形固可使如槁木
荘子 細 死灰槁木のごとくはく背へしとや
この行ひのましけそ後まゝとそゝしましく

如く返えとこそれくなりつまもさすし 源
の返り如さる事也弟子也也
恭うらみしかそおくしく給行こなひをいと
まくして法花経は活しまりと法文なとをいと物同也
よこ給ふ書あるくうつく人めも多く左のまゝそ
細 みなり如ぬるも
あなた事給へくなりける 源氏の心也光八月前
りにしそ自然の体也己家山へ昇し時後如卿
よめるや とやうちろや書まさとふらん山の奥のこ境
りなくけ
年を経ぬ玄乃うしを見え深北わるまちなれとと
やなきん心はなくなる 細 萬葉廿七巣也
見みそさなとのはしへもかしやとひとてなされと

かくその如月とのまへハ二条院
　上句の心也白雲
守覚入道親王五十首の時の哥　峯の雪けのおもかけに
て見ゆる桜さくらかなまさるにほひそへ侍しと
としも山桜とも見ゆるを也山桜を白雲に上句にいふ
詠める也　細　白の雲年ふるのる也
うきくも山の雪かけのおもかけにもそらにて
　上句哥　白妙の雪山の宮とみへしにつきてとも古
乃原の雪かゝる白雲の積りしるかと思ひてあるか
しきとも
かくてのたくさめの上句をたくさんの心を侍し
終夜ふかくてさしたるをみるとも思ひくとに
ちらしかとしひとつの時とおもひ
　さとうけしハ去年のとかく詠みしにつきハ　上句の心也あるか

我ならぬ若菜のかくれしも思ひとの時とおもひ
つまとへ白宮寛母見る子ののさまるへし　哥同
かれをとなりそのなの錦りへくへ人とそてにたりのか尼
見のかくく　それそあの錦也　同　寛方親王譲り
かつまとへく融院によりや宥
山里の雪きのかれはちやし花はひさしの都より　北
尼公哥　花のさしたるに上句のみるや摘もやとも若菜
そく続詠んなるへし
とそこなさに立りのかりこれハ　上句のかるへ也
雪かくれ雪をこれかれとみるハ見るたのて年をはしへき
　上句逢　雪かくとも尼公の為にかし摘侍りんとも
年をつむとよつるは尼公の長久なるんとの祝ひするなり
尼公のためをそのつまりとも也

やはらかさ花やはしらんと哀なる心を　　尼公の句也

よ野やの山のさくらの花にはしらんとよみしなり

見るかひあるは花を雨ともえましうらを也　　尼公の句也

よ野の尼よ奴花をよまんとも

まめやかにうらみハ行桜やの花さかりてまた梅のかほりも香

とりかしぬと　声入り思へるる花よりとの心也

古今
きさやむかしのとしの花よりもとしこまにふるきをものあらハ

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

伊勢物語有　業平此哥よみたるハ二条后にあひ

て又の年れむ月の梅の花盛なるにおもひいでていとき

て立てゐてみれど去年に似るべくもあらず

うちなきてあばらなる板じきに月のかたぶくまで

ふせりて去年をおもひいでてよめるとあり今

野もと梅花をよみくる業平か此句をとひあるをさと

花よりもとむりしとよせ給也

河さらし白の花にあらはや

此句も伊勢物語の

句よみかし業平ハ二条后よりもとめ今よ野ハ業平

心をよくめぐくあけるし白ひの花にあるまやとえ

此心也伊弉花ふけ白くなりよ野心とよろし　河

やとあり雨降白菊あへりよ野やの心よみ給ふして

細　河あるさらし見かふかひのかりしさに梅の

花をそむきハ行つつ

細　菊まても白みくとも

こやのあるなかしせ給

よ野の夜桜よまつ行也

下らくの花のもとしかくなうあるめし出く

とりかの花の花也

花をおしくされハうとう風しをおくりけく白ひ身を

梅花のやうくちらす抄しもとわれハそこはたくこつゞきて抄
ことちるとのみや
袖かへしくもみえね花の香ハ手まさと白やあしきれのかれ
ふるき哥　袖かへし白宮ハ旅今闇にハ見て行ん
籾ともこそ花乃香ハさらなく其人の身ひろく思ひよ
しや　秋　おれ詞まてん也
古今哥のむきことしれ紀のともなりかまかりにける時の哥にて
きこうと三十まうりにてかくらとつきにほくうのわうさ
ましきり
此歌ハ紀のへ此人雅ともまし　紀仟あれ更が手やふ
何事つき絶たるしかとこそハ　大臣云孫也息の息也　志年志く年よ
と大臣云う同也　細　一任のおひさみと也
ほきくし紀ちきうれもこそさにきて　大臣云

こるかほきくし文御あれハひひすしとてむとゆ尼
云乃かく人紀伴ちきたるや　細　大臣云乃かきたろう
ひらうしとや　こなさ　細　尼君也
いとうられくこきしもつく行まくれ　紀ちかう詞や大尼云
乃本
哀つと待つれのこゝまる紀ちきはとれまつ申かくて
とふまか様り年月をまくし待うよおやたちとのし
行うて後に一事とてやうりに思ほのし待つき
紀ちうか歌ハとやくなくあうとえに見く侍りさきく
こ後ハ此大尼云をまかりくに見るに時有紀ちか様とう
あし小家やさみなほとに年月をゆるほとハ紀ちり
肯しるや
むこられかまハとと時々様かくらとハらとつやちう人し

當任の常陸守の北の方は紀有常かむすめといふなり
在中将の母君はあらすとや　た〻これ常陸守か妻なるへし
花
常陸の北方かさき母なれは其の母也といふは紀有常かむすめ也
妣なるへし　弄　在中将のまゝ父乃常陸守になりしとて又
常陸守の前なる人の北の方なる人也し紀有常かむすめといふ也
る　細　花宮有字母乃母と有也といふは當時の常陸
のかみなるへし

年月はなへてはなきこと多く見る心の事なきにさそなん
ひたちの守のむすめをとつきし事にて行にさなり
尼君乃紀有常か妹を尼也といふ也のさりしさまにて
をいひて常陸の北の方は在中将か妻なりしや　細　尼君乃
利者はなきにとも
えにはつかはしける使者にて見し侍りとの給ふ

常陸の北方とは尼君は使者を給はせて後ハえなきに参り行
ましなとの尼君乃御也　細　尼君の出家をとかり
我親の所とおほしなく弄　在中将の母も常陸の
北方とはいつ参て常陸へ下り又北方とハ母君の
るに物されたおはしますいつくに有ける使にや
又いかやうなる事のありて日にはまかり給ふおほやけにこ
との外におはしけれとも心よりにこそは侍らん
紀有常の物をあやまて尼君紀利乃いつ
明日もさふらはんといふ　紀有常か母君の
出家して夜乃宮仕乃所にまゐりて参り
のもとに給ひし尼はおはして　紀有常か母の
日ころ行しはこえのゆゑもなくにかたらひ給ふを　弄
明日もさふらはんといふを羽の君は見え日来ぬる所

に略すハ来りぬとの儀也
又人一示ハ一年に毎月あまた　是ハ大黒のあたらしき也
その陀羅尼をも文字をもへなり給ひける紙　是ハ
に経のうちをかくる也
ら老の事又ハ経をかれたとその後そのわきさきや給ま
ちんちとハうれ寺の律師にあんさくるむの給ふるとて
御うれ身のことや
すふうしもうれ女のさうそく一くさうさててうしゆくつきさと
紀事の受領(ジユリヤウ)をまいらするにしにもたうそく一くさ〇つつ
うさつるへきよう経蔵付とも惣別の事やうの猶(ナホ)ニ女の
装束を調(テウ)して仏布施(フセ)にとらし給まうやかまへ
受領の役よしあるとも
せさを給てんやとしてつかふまつるのらかきてさ行あんと

紀ちりの綱也　五七は仕丁(シチヤウ)給ふるへきうちやとしやらん
はうしたる也権那(ナチ)のあるまへし
いかさまにてそうにあつまるしけん
薫の家をそのさまにひし給えんときくにあそれまう　に紙のいや
やのむむすや
人やおやしやうんとはましうてわくにむかひてあ給ひ
とかへのたうややんとに紙奥のうたにむきそてぬ給とも
給ゑうれ給しつとのゆうにれたむをめハかうさとかしゆくしさと云戸
の宮の家のうさらつまさそとの給へも　五七の綱也ハ文れたるや
ひとおとのつたのちれハおもうさとたしあるへし　紀ちりの綱
五否也に紙のうすや　おもうさそしやらん服とれ兼や
おとく装もまてあし給ハたりくるをいかへしきうあつしひ
給ふ也　に紙権令れ時そさまほとにハおりひ給つき

かうもとらきて給ふすか致給ふすへしやうらくや紀きう
詞花ふかゝ給し時大宮に姫ありと薫の事しるし給ふとや
さし次のいさいかしうちまほしく出家をしたまひつへくり
きうしなと思ふ哉　是ハ大君の薫のうちかな悲傷し
給て出家をもし給つへくうかなと紀きうる也
わらしくやんほさんどるを思ふ也　弄細同
うちやうりれさてしなく人なりけるとみつかはもさはつ行そ
ろし　薫のおもうちて下の人と出すらむおそろしく
よ哉の三ふん也
あやしくやうれ物しらしこほくうちもとや給ふらこときのうち
いと卯ひんに侍しり哉　紀きる詞也大君とひとよ哉
とひゝつまとも宇治みて同振ようや給ことしとて玉ひ
薫の作ほしてまうるし時も不便(ビン)ニ侍しとんはらてと

色はしやきんうや　河　同振の物と云也とこ
花　やうれ物とい子細ニ侍まてかもいほまさあうかやしくやう
の物ハたくわやし　なさ殿の物と云ん也　振の字をハやう
ともほいよとも云也と　細　行うしやうれなのとも
川ちりふ弥ておのそれ行ていそし色きれ行き
紀きう詞也薫れ君との我さゝ又哉ハこしはて弟と
なを給しんといかへしをたれ行ひしましとかつうた
薫うちさ子のをゑ之てひ給ふと也
うちよの方行て振まうたは付給し　河いろさふしくみと
のそさて君すりもとへの方りて古宮れ寝(シン)殿(デン)の振
うしい哉と出付給しそしと云也
思し人も親ともまつぬちれ子不落そかなきといつくせれあし
薫哉　よ哉の方おけしまとたう新もとくめ給

こゝぬ抱ゆへに家洞ハいとくせなかんぬきや　紀きたかゝる
ことや
やうん偽しことにわしらしての詠すハとくあらんれとた
きしぶ文らんハいと哀なる詠さ彼よ分ん乃人し詠し
紀ちうの詞也薫乃云ゝりあしてまくの哥乃かすとの
詠すハさのこちうけれとも法々しなハとのゑの名詠
中にも居云よくてあるや
女色にめでしのとめてなきりぬへくらん　紀ちう詞也薫
ゐはすの心をよまをなくしん拾称とも此女といへるらん
哥も頭花なるをとこうにや
ワくりし時らつうみ行りしまれと見つなりしとみし
らん　紀ちうか家日乃我時よさも也ゆへよおもれあとく
薫乃ことをさうされハ薫よ紀ちうかん恚とたるとや

細　家のハ丸の歌薫とその事なるや
世中此一乃事を何ともいひ侍るを　是ハ関白家也に
とさ云う院関白ハ此の御代なれとも紀ちうハ今を
色好みとも思ふれたく薫をとあの事なるとや　年同
河　さ大臣一人と一の事ハ式又一の人ともいふなり又
(ミツヘイ)桃柄薬二一庭坂二称二人文理二一事二云々　細　桜政関白と云
たくこの居を年のこゝ世のしさをてあらんもくし侍ぬ事と
かゝるたくよくにおりれ此をもちけたなゆうやら此人ゝふ御在
位をも見しつまにくるとなりふ　も哲のんや人とハ紀ちう
うるすをといふ乃薫をすかと紀ちう見え知らん也
居気ならる気とかすらん古院乃御宿稲すはえ分ゝひ給ひ
しやおほゆる代　・居云乃詞也源氏すハ薫をも及詠を
しやおかり梅乃代とや

たゞ菊の宿ハ以後そうやめそて遣行ある　為氏以源
氏の子孫の人々しめそてし遣路との縁也
たのむハいよゝやのむ後人も　是ハ夕顔なる也紀もゝり
射して后公のうへる也夕顔と葉とハいへるを以詞也
ひろくにへりめそゝれ路との糸也　弄同
縁
夕顔とハ何遣そとや
それハいかにうちとはとらぬりつゝ　紀もゝり詞也夕顔
うちハ又一段なるすかゝる也
こまかにえつくみてこにしとみるさ歯そして行へる
もとも夕顔のつゝりをほめたり　河宮泡ゝ
是ゝ宮そいとふ見しをおもしろや　紀もゝり詞也
夕顔みて白きハ稀まきてうつくしかゝる也
女にてあれつまつまやときんおほく侍る也

紀もるの詞丞女のみしも白きみれ侍る人なりけるなれ
うらちとや
とし色そゝんやうにいひ侍くも　紀もるの書れて
よる路をハ又て月路よんへのうちへさとみ也とし
つゝんやうにとハ紀もるの書よ此すしの路へとい
かやうよゝるや也
哀みも打くしくもきくにあのゝへも　よ書のうゝる也
紀もるの家ゝかゝる紙さく路くあれてもさせのやう
つやうにそふとや
さ世のしくともおほしを　路　まれ人のやうにゆうりをし
てゆかてあるやや
とこほる車なくかゝるとときてふそてぬ　紀もるとく
こゝるさとなくてゆりて侍るとや

是れをおもしろしとハ也義と思ふ事をいふとてこゝの心
人のちをしらぬれと　上臈の心をかくハ薫此
君と主と御して一周忌(キ)する事をしはてとすも也義
斗字あるよし也
中くいふひるしけまをみしらすてなまし人は行てと侍く
ましく立侍ける　上臈の心也歌を返と汝のから
さいやとおほをきゝとわきまと中くそやうの事なと
女房家とにさてまんハつましなる事とも
かの人のいひはきしまる事とそめいそくと見ゆにつきて
とも　きハ紀ちう薫よろその物つきたる装束を見
こもし侍るにや　上臈のうん
おやしきめつしう歌も心ちきれとう事ても心ひ出
らまほ人ちぬへあとする事を　上臈の心也あまた世

よなくあるやうなれと今はあらく人あるにそて此す
し侍事とかつしもこゝる也
きは侍りしいまは　居士の上臈に見ゆ侍るとも
物をうつしとらしくましてをゆへしかて　ぬきんでて
花
さんひのまハしとをおり上臈ハこゝとも居士此詞也
こるひとへのみえとのへるやうに　此　こゝの物事と
もひろやうなることをわり
こちよのひとへたてたりまりて御ゆま居士こ世
あしとても心つまは　上臈の詞ハ此用をこちら
ゆ此御装束を居士るとハいふ侍ことゝもやまま
歌とや
常侍へり　上臈の心さ也
居士ハふくさとゝちすてへかほさうて御と云

とられ給ふ　后云の詞也　まつ聟君のちからおしとて　かり
給ひとられしく云ひくらひ給ふ也　私　まつ聟君の胸ふさふ
と同やうや
ねたり梅のとや　ゐのうちなやうさ　折く中まへつれつ給
とこそましてもへられわさましき雲そめなりけりと
やといふ人あり　紀ちかうあつくて仕たる家来
なりまつ聟君けんやうなるところおもひをしてそこをな
る人これとんでの事也
はさ良から給るあるや肴し世の事に神をとらせて思ひん
まつ聟舎　主君后まぬ給ふことを云の肴し世のさ
ことに神をとらけて思ふんとハは御家来ハ我仕ふる仏為ふ
あらしく地このことにはは御家来ハ神仰けく思
ふんと云る也　弄は仏や后まぬるるあるれいう給

御家来とても　善とや悪とかんとも也下ゟのは御家来ハ
主君の為に仕ふるの料也されば善とも云ふ給ふ也とて
細
うら給ふ御家来とても　善と悪とのある也下の者ハは此ハと
あるとも主君の国忌の佛事の料なれとも善とも云そ
一西のと最大なる字也
せうこそていとわろくなくともすりなんほよ物のうれる
き世なりけれハとてあるを云としてうちましちます
てめくしあるとや思ひんあるとさ候くさひつ
まつ聟君の也　おまつりに主君と后云よろしさんもい
と押しさめての織也后のにしりおろくにてかのめの
しき給ふるへし　私　まつ聟の御主君るくたらせらん
まつりのろそとかられしれ也
ありしくられるかハ西して　云進候ゆかしと　私　まつ聟の詞

細
猶よつまれしとこそ見えてかく思ひめくらすなるへし
うくにて柳はのめりしたゝし
かやうなる事をおほしいそくにつきてはしそはつうらん
哀なるとおほさるにの給　只とおもふ哀来をそめ給な
とし給をいみしく若れるもの出筆さらしを何
やちすくも聞の居士もの給ちなるへし
めりしとおほしそうてはおほさらんを　細　居士乃詞
清むともふそて給して知らされ　居士の詞也も聞
乃心よもちてやしもそ哀は隔心し給を知らぬとも
ちて母はら聴よの清き乃こゝにひるをひさしく言まに
それも　居士の詞也我もてやうに給縁なる哀来な
とれ知さし見も是おつら見はしうらんとの心也
なほくし見給らにつけても　居士の詞也哀八出

家つくさやられ哀来をもおつらみ見し心をも下さしき
乃中也　居士乃詞わらむをめ
若れ人おしまくらへなきと思ひて侍ら
乃事也　細同
ちうあつひ中にし給らんへ言にわたるとらんや　尼公詞
我むもめおいかりやうにも聞もとも何つひ給しおや
母とせふまさおるらとも也　花同　細　母とこり
かくなくれしさみ侍し事に給ひりにおもんそとなた
若きうあわりくおほし侍るとを行来そしてちやうし給へて
侍らんうしやの給へる　居士詞也哀むをめへなくある
とみなてくさん給ひりにかつやをそくと若なさりま
しても聞はゆく源をしもぬやうにありゆくへ給の
知るゝことの彼也　弄　母のうはわかるかへすて旨

人とさへうくる子まやゝ
見ゆる沖まては柱八月の行き　よ碧の返答や
春也りあり時より八母なりしか八世よ背しとや
此月はうせやし給ひつらんとて後のおくりかはすきうし
てなうく思ひつるにつきてそ事得れとしてえやかんそね
よ碧の祠也此年は危く出度母忌八うせ行らんや
及くそ八行るゝにうのこし侍らんとこともなく事ふの終の返
州
よ碧祠也行事よさの事八陽的八やんとちよます
ちよふの終とや
大ね八これをそてうわさるとせさを終くちれく事とやと
ぬるかれと義りお眼とと　芭蕉子塊や
花　うき舟の一周忌のとふらひとし給ふるやとと
細　三月乃きぬ

このひとらん子ともハかう事ちえてあるを飛人よなりし
よ碧乃母君れ服の子とともれるやうかうすちと八元
服乃まだ成るへし　花弄同之爵よなおしとく
大略叙爵とうちあきやあるやされとこそえ服せす
や六位の飛人とかんてたり
ある時はうきのそうにあしなきといくさそもと終える
出たねたま民まはうきさの下れ右を逢ふますし給ふとし　芭蕉
わしそ事ある中にいきうきせ行る絹をちうくはうひ事くさんと
そおりしたり有る
よ碧のさくへ慈れはうひまつらへさるゝへや　芭ハ小見とそてよ碧の事なりしはよ
雨あそとありてえめやうれる秋　細　四月や
居の宮り泉り行くりはおのとやうえる日ゆてはる終るを
やかく行つうそて　慈卯ん中あへゑ終や

あやしきは山里に年くるゝまゝかけもかたらへしとも人のそ
しりも侍りしを　薫の君宇治にまゐるやうに思ふまゝと
くるゝも出給ふや　在同　人のそしりも先其のまゝ
さる人なれはとてハあらしあ
みやとや
非もんのすぢかゝる所ハさうゞんあるやうに給ふ人なしつか
ど時くみ給ふかたしを
まつもんのひくかしいよ人のそうしもかくしぬるの
薫の御やまの隠るゝた
そとや　細　おれもみもうちなとにとまり行幸を
むかしなしもとと云ひ給ひし
ところさへみやもんく云給へなりにしのちもみちもこもりなを
なに思ひ侍りてひさしきを柳し侍りしぬと
をおしき雨とはれ萩やまおの大君に思ひつきもう　宇治と云は

やう給人なとや　花　ちゞにハ思ひたえ君浮舟うせふしなや
雨経宇治ハ人みなゝどをくもしんなりをかあるとや　在　人のうち
たゝ雨なれとも見るやうにむなしや
さかしらの中のたまさかにさうらふて　一周忌すくまとわりて
中　つまひま宇治人わたり給と薫君も中将殿也
近衛なとくいふるもされや万葉に哥よくいのさかいと有
細云　ますら也　弄　うき舟の周忌の法事に時も　細同
そこれなる世の有様とりかさねくやよ行人々に
一周忌うき宇治人わたりを給ふとや見るるからねてとも大君　まうで
あとのうちや
あとのはとさもくはゆうなるたりあるひしきれを
ところやうんおほし給しとまうし給ま　八宮故宮もと
人にもしはへく想出給とや　弄　八宮の御ふ人まとく

こ給しなとこひ給ふ　細　行里たちあるや
うち事おほしいそいと打しきれハ　おそ僧都のうら給
しき程のるや御ん中宮打あり出るや　細　僧都の
中やしるや
そこたハおそろしき物やをもしんいふやしはくうの人ハなく
ありかしところを給ふを　中宮乃詞や平等院の
事やうれんとも是ま程のこともとひ給ふや　細　中宮御詞
なりとうちつぶたる紙おほしま給ふかさやせひく
細　大君うき舟のるかうちはしきたるゆんきうきにうくの給
うと薫乃き給や
さとも侍んさやうの人ならあれある法をようしぬすのらんう
あらをすとつまきりると　薫の詞やさやうの人ならあれ
たる所とハ平等院の所まそてりろくへともをまのぼうれ

其たる所まハおしなるのくもとり行く物をとのんや
うせ給しを御あんいとかやしを侍るとそてくりしもハかんし
給ふ者　薫乃詞や　ほ程乃事
其らく思ふるとちとさるわろりしありぶとこ給もんかいとを給
しるおほさると　中宮のんや　薫乃思給ふとこきくいは
ちらしたるやうにかくくいうくとの御や　細　中宮の事を
あるはんや
宮乃御をとのとおほしうるそのこころハ病よありけ給しとおほし
ありけるたも　中宮れんや是ハ白宮れるあるそる程
御人の病を物給行しとおほし合をるとや
さ給ふふむくるしうてうくいはれあくさんへのうへとおほし
とのり　中宮の御んや　薫乃思ひ給ふすとらひ又白宮
の事かくしておほしとらむるや

小宰相にまいらく　中文の羽やはんへら薫のまいらせんへし
中宮おり宮はつ子やそまたに君ひくの給也
あねうのくれまもにいと哀とおくの給しにいとおしかりて
うちてはべるましきや　中文の羽や薫のまちおれ
ことゝ哀とおもひつゝ見んしはべるべきや　左　中文小宰相
りの給ふや
そまた君もわくらん物ゆへに侍くましかそてあらん
中文の羽やまちおれるまゝと見てあつくんはべらよの
侍んかうふや
さきそ〱とく中文わくらせたる　中文の羽や君とて小
宰相かうやせとくとい給ふすくやけるいまや侍給ふ
給つるを申まや　細　中文の宰相よの給也
ことくまよし中文しとおもひきと薫にむかうちまへしと也

かくん申〱ん申いはるとうくしてたへるすきんわつゝあらとん
かとらゐまくらんはいてに儀部の少ことゝうされとの給ふ任
中文の羽や申たりてとう中にもおほさるに中将くゐこ
とゝきいうくしてたへぬまちおれとく中たるやうに物語
のほかにそてにうられとや
給まへよそにつきまゐせ給らんと仰まゐてきとしをもつて
うと申さまてこそ
て我ゆへいまかふとして中つゝはまよしとや　細　中文まゝへはしてこの給ふにまうし
ゆうさくあらの事に候へそ　右文の羽や白ゑの事文薫　細　小宰相羽
右宮羽とらへおもとおもふかうまわらんとゆきくとおもり
かるすさ後くにはうらぬすぬへしとや　平同
又まらはいとおしなるすそあるやとの給ひけるも
色は白文よ給にかつらまへんはかり給しとい辰巳

物語人ときこゆると薫は人の語らひされしもさまは小
宰相なれとはゆかりの語なるべし
花 さんとは白く見えてもとなく云語に人なる故宮方はか
くし給ひてかねよりもたと給ふと人もなさてあまりやうられし
中宮はうちかへさくおほしめしあまりなるにや小宰相なとや
うそぶきてもろしと思へるもこと
細 白の御まへあまたはべりしを御覧しなる御花説はいつく
もしておほしと見ゆる　小宰相なとや白きとも申侍
私 のなれるまにもとと薫まゐらんの語なるとおほしと云る也
宰相むこ見れたと給ふ語ての語をねまと云人なる也
立よりて物なるをたましき語はりてよろひ出るなり
小宰相なとへ薫の立より語時のことは何ともなくもあるへし
まかるをうとらひ出るなる也

めつらしくおもしろきやうになりたる語をもちらしん
細 薫の心
宮のことをも語しもうち添ふ事をもほのかにしりてたのむを
つも　中宮の御ことなくおほすまじきことを語しをさ
てはこの事をもすぐれたる語しまと薫のこゝろなんなり
私 后の宮は御語しまる薫の御心合語なり
御ことはりの語なりをきこしめしあそばしけれと　薫の心也
中宮の御心もし語義也と御心のことをもほのかに計らひて
の語ちそてかはかなきをうちかれとも申つる也
又も文をしめよりかくし此のるかしそのことわりしけは
まかるの事はかり中宮よりさぶらふを見れたるほの心みりし
語ちうるとみての語をそてたるも理との義也中々にそめあさ
ましうけむと白きと切く中宮の語ちそてかくも理にてとん

程へし薫の心 又同

やすて後もなとおもひ給しなからもへんにもよくよく
さぬきとゆくはかなきは御ゆかりをもおもはんかし
薫の心也 浮舟の身をはけにあはれにかなしきとかやとも
くやしきことはさらにさなりしとや
うつし人の世の中にまたのこる事たちかくれのある世をたのむる
をひつかて 此女の人の事ないに思ひつくしまいて
なれ給のことはわすられもせぬ人のうへしとや 弄同
こゝろのうちにもさまく有しことゝもはりしたへんをひそかなれ
もまた思ひして 小宰相をも浮舟になして御
前よしかさんをもひとたひに心ちし給とや
なにをかやしなひしことなくても有るまゝの有様
の御 薫の心も唯今小宰相のこゝちはすへからさるあやし

ときこえよ浮舟の事にけしく御心のうちをも思ひもとに思ひ
んかたりえへすてくの給也 又 薫詞 浮舟のうへにふ
よつきたるまとや
けくその人を給わらんやとの給へも 浮舟はとも小
宰相有りと 薫小宰相よ御給也
うれ侍給の山よりもおりし日なんおほくにかしつるらへしく
まつくひしはかなも 又 小宰相の詞
みなる人たしこそせさをたのむしときこしこれは又あらぬよせと
いひくなりぬるとこそ給まうしくとの 浮舟なん
あとにかなしゆくにたるなとわしこそたにはなく
さなりしを浮舟の思へかねよし侍給よの給ひて
たりしもの給とや
われもかうしはそのしつれ有様と思わてもまうにたかふ事し

あけまけはすこしにそれとたつねいてさらんいとわさましき
いつもおもへとなれいつそうはきこしうたにかくへき
薫のこと也兩ハ宇治といひ又京の宮信さいさくかう
かひしぬるといひ合給也　弄　とかうも宇治まてかす
なれとやと
おりたちてえあるまんもかくるしとやへのうへはるさん
弄　薫の性也上﨟なる也　細　薫の性謹慎也とそ
又かれ宮もさてはと給へてん世はのみしもおほしいそく
匂のことを薫とかう
ともへてそんみちもさ毎手をも給ひてんし　孟抄
匂宮の出家も必匂宮かれさてはと給てさ毎たを給
さんへとの薫のこと也
何くさるの給そあると宮すくさとさ給なれとかやうにまよさ

御ことあん宮のしとたのめつゝしおさとおさくしかしあ
かくの給はせぬすやなえん　薫のこと也中宮より匂
宮の薫をはかくし給へとの給ふや性すへの給つきし
とや　細　匂宮の御ん中宮へ薫をはかくし給へとや
さきしうとや
宮もかくはしひ給ひて八月へ色をうたまてさひおかう
ともかしみやうてうをにし地とさすしてとやとまん
薫の心よ秘の名のしくたるよし宮すて匂宮かくはしひ
給うく秋山みくさかともやうて名歌はうせたかん
とさすして薫ハ中まんとの心也　細　匂の君給事
しおもあしきとまと一句まそしおさてかくて為尽とや
うつしへよ姫くハ　薫の心也此世みくハ家ハ京人とちう
てよ給うは来世みくハあつんの心也

細 いかさま此人は数ならぬとも後世の縁ともなれとてなむ
とやおもと一句によみへし 河 同人
さて此世にて黄泉にいかなるへしともなかりとおもひしかは
月のまきれも有なん 月ハ源氏の我有物なる所
も我ハ身をうけて罪有人なれを定てかの月
まむかひ給へしされとも源氏の月のまきれさ
むつましさを給ひてあらんとの黄泉の心也
河 黄泉(クワウセン)(ヨモツクニ) 冥途名也 日本紀 花 黄泉ハ日本紀に伊奘冊(イサナミノ)尊(ミコト)崩れ給ひ
ほかへ入給へるを陽神(ヲカミ)のしたひ給てみかへり
きて給ふ黄泉舟の事なとにいひかへし給へる 私 此の
世の事也さて 細 冥途(メイト)也その見よせたる人を思ふ
心しめ也
我物はかくしかんの心よりもうるしもなき

本意そ 黄泉の心也この源をおもふゝかく物あしき事
ハ心まへきか心也
彼の給ひをやかへんとおもへるかの中ありて大ゑ
りきかへきえ給てはかなるのにて事そもかへ給
黄泉の心也大宮と后宮の御事也あさもの源氏す
と思まへの給ひのへとてもの給ましきとハ思ふ
うへ彼をもゆるしきに黄泉よりもほかにてとをかめて大
宮よ来りてこの源のこともの給とや
あさましくもそうるすひ給ぬともあるへうしん
黄泉の洞也この源の事也大宮のうせし
世よ彼ちあつまそてあつやうに人のまに給ひ給しか那かりてう
ける事ハ待らんとおもひ給へまと この源世よあらかなれ
て有よし人の給とや

ところ〳〵しるしおきてこれ御らんしとゝめ給へとやと
思ひわひ給ふ人の有様よ給ふ所　此詞ハたゝ様り
ましくしうおもふをおもひきこえん人まてハあるまし
乃心と大宮乃御心と御中の詞也　手　此詞の心との給
〳〵　細　うき舟の御心を申給ふ也　抄　思ひとこそかさの
此詞にたゝ今人の御はしもあしきとや
人の御ため給しやうみそへハ御いのちやすきやう給はんとおもひつゝ
し見えぬ給へし御心なそて今とてもしかのし　出給
変化（ヘンケ）のものゝ此詞を見たるやうに御まゝはさらにも有
思ふとしや薫の詞也　花　うき舟御心を自ら思ふらんと
見え給ふ事ハよしや見え給ひ人のいかやうに物り
きこえしまたうるハさもや給ひつらんと薫の心へ
給ふ也

大将の御ことをいひとゝめつゝまたうちたてたるさまは
見ゆひとつ〳〵給ふそ　薫乃心より詞也　自まめ乃此あり
とをき心をこめてまつりきこえたまふらしとあるや
みたゝひとつ〳〵給ふそ大将の御おもて給也
抄　薫乃御さま大将のまゝまれとも宮のこととはのつく出
出給也
うきたと又さまんと申つゝを給へいかゝ思ふをあまく
しるしとおほされぬへし　薫の詞也　此詞出にて候よ
し白まゆや給給ひて又かくあらしきをもてくしき
此んおもんとや　抄　宮の此詞れる御文をく給給
つゝみて薫の給也
此ふさそおもひとも思ひはゝかくもくし給ふらんと
まつり給へとも　薫の詞也　御そうし此御せうそこひとつり

府よりこそうけてそもくさんよりか給ふや・
俗敦のかうしにいとおもそろへるましよのことかく
かへるもとへるめきらるしことにそ　中宮の御おもて
ろしるもの秋の中かくにおもね平ち院まても給と
やさかれ給とて給そろへき之宮になる耳める給は
しうりそや薫まの給也　中宮御也白宮女ま御なり
宮ぶりて二のやま給ひん
ハことりしとや
やかんくとるりあるけんの君とも御とをはれ
大宮の御也白宮の好色への給ひんへるとあれは
如とや　細　白宮の色もむつしきるや
まし宮めきつるを給ひんしてことくるしらん給へきえれう
多すまへまつきてにいとうへくるしき給ひまのこそわたる

給ぬめれと　白宮女の心をも大宮乃おほしめすもたえり
あつかはしくてゆ給へるをやま付給て又まうりすく
君さまをみそしも給りて大宮女はくるしうんとの給ひ
なやうにの給ふをゆ給へるを白宮女のむかまえるを
薫のさ人それはさをあるまつしきのんとの給へり
ふくみとの給それ　大宮御白宮女好色乃まれに
はさそてまへうくう給めるをそに立給へとも中宮の
心うおほとや　弄　中宮れ白宮女の給ひするとうすかひ
給ひおもやんや　細　給ひ親んや
いとおりおほえ給ひあそれをうつくしをしもうちときと世の中さ
まほくもくもへの女の思ひくるしうんとまて　中宮の御は給
をもくしかたれ給ひあれハ卿も人の思ふつともなるもこゝさ
しゆしてもあ斯余まりかうう給まつしきかとの薫れ

細 中堂のほとりにてやロひろく寺とおりしまはさく毎へし
花 花よりも下は皆薫の心をとのへ侍るや
まつさせ給ふし寺とおほゆる　折 花さかりへのまへし
をむかし山里はいつくにかあらん　薫れ心や見捨れ
宿とさく小野の山里はいつくまてかあらんとや
ゆかりてさ候あれかし侍るらん　薫の心や
御堂を可然やうにて見捨るを哀とやとかへつらん
寄特なるや
便部はあいくしたり侍しかれ毎宿様をも中あるを
心としてとてもかくもさせへられるをたくいひてとあれ
あるしお侍るを　薫の心や信給り何ひ給ひてさ
給ひのことをうすしうにてや中給ひつかまりしことや
月毎の八日ゆはりあらしをたてとまてかさせ給ふをあるへ

是薬師仏よりせちまうたにとてありし給へるたまうまた
薬師の縁日なるはいとも有難かるへし毎月八日六斎日の
始也また薬師の縁日なれはなるや
中堂御はいちよりの給ふりそえよるにやかて横川よりおりたを
むとおほしめし　河
根本中堂延暦七年伝教大師建立
之本尊薬師如来者大師之其以為梵天帝
釈四天王忠仁公月光并寺治関白十二神将御堂
関白被造副之云々　弁
常に山よりのかよひ給ふもあやしく
まつりてみとおほしめしあるかりさたまりてハわざとおとへ
おりしまほしきけれんや
御心せうとの口しひはたなるみてれつを　となりの小君
るみやまたと中堂への御供又薫は是給ふ小野へのたより
あるへし　細 ひとらけれたるの子や

きみ人はことにきこしめしおほしさ御すそえざうらんと申ほ
せと　僧都の君にゆかりしと母君兄弟なとにはもらし
せじとれ薫のはんも此有様りきこえらんとや母めれ
となとや
うちみん方のうちうちの色衣ととらゝへんとうやはりえん
僧都の不思議にも世にあらん人のうにあひ給ひてさあらん方
のこゝちせんとや御まえおすりハ給ふ衣ともらんと
のゆへりと薫れ今日給也　弄　浮舟のことを申させ給ふ
給んや先隠密（ミツ）をへしと也給文此人の不思議なる
まとも八と為わひくみん時衣をそへよとの給ふに
やるさと案じ（ジ）給ひ又おそらく紙なし給へることあや
細　先みちみんはもと衣をそふべきたよりにしてあるをかしてい給ひの
みんとおこ切なし（れ）ゆまそて見つきたく宮えれやうあらんとある

さもとくにその人とんこつきあらくおやしなきゝにふかきもち
ちとなきへれなさにうくうれしとはとしつきまさんしそいひこ
ゆる人なれとよろいをりみちをとりし御使しこゝされあらすや
薫の心や小野にいりて僧都と八兄のきあらん必かし
給ふと思ふあとの中にそて事きて法をたゝんハ心の
さきゝうらんや登山の心をとらえるつよさところ
給とや　細　有様打うしをあつる人りなしてなをくさ
とや